

## 石山俊著「サーヘル環境人類学—内陸国チャドにみる 貧困・紛争・砂漠化の構造」

■出版地：京都 ■出版社：昭和堂 ■刊行年：2017年 ■総ページ数：232頁 ■定価：4,600円＋税

井森 彬太\*

石山俊著『サーヘル環境人類学』

本書の筆者である石山俊氏は、1993年から1997年の間、3年8か月にわたってNGO「緑のサヘル」の職員としてチャドに駐在した後に、大学院で研究を進め、2014年に博士論文を提出した。本書はその博士論文に加筆・修正が加えられたものである。

チャドは現在、ボコ・ハラムなどの活動が続いている。そのため、外務省の安全基準ではレベル3（渡航中止勧告）およびレベル4（退避勧告）が出ており、現地での調査は現在困難な地域である。そのことを踏まえると、チャドについて実地経験をもとに書かれた本書は、非常に貴重なものと言えよう。

チャドに関しては歴史や政治・経済・環境に関する研究の蓄積があるものの、著者は「チャドの抱える諸問題を構造的に明らかにした研究はまだない。本書は、貧困・紛争・砂漠化といったチャドの諸問題の構造を主に環境人類学の視点から明らかにしようとするものである」（5p）としており、この本では複合的な観点から論じることを目指すとしている。

この著者の姿勢は、チャドの抱える諸問題は、互いに独立したものではなく、連関している構造的な問題であるという前提に基づいている。この姿勢ゆえに、この書物は一般に環境人類学で扱われるような環境や生業に関わる問題にとどまらず、植民地主義やナショナリズムの問題にも深く踏み込んでいる。その点で、本書は地域研究としても優れたものであると評者は考える。

本書は、序章、生業・地理・文化について論じる第一部（第一章～第三章）、前近代および近代の歴史を論じる第二部（第四章～第七章）、砂漠化問題と住民生活を論じる第三部（第八章～第十一章）、終章に分かれている。目次は以下の通りである。

序章	サーヘル内陸国チャドの諸問題とその捉え方
第一章	チャド盆地の自然環境
第二章	チャドの農牧漁業
第三章	チャドの人口分布・民族・文化
第四章	サハラ交易とサハラ南縁のイスラーム文明形成
第五章	フランス領チャドの形成
第六章	フランス領チャドの植民地経営と独立後の経済
第七章	チャド独立後の政治紛争史
第八章	サハラ南縁の気候変動と砂漠化
第九章	チャド湖沿岸の住民生活と砂漠化
第十章	NGO「緑のサヘル」の砂漠化対処活動
第十一章	改良カマドの実際の使用条件下での効率
終章	サーヘル内陸国チャドの貧困・紛争・砂漠化の構造

以下、各章の概要を紹介していきたい。

序章では、サーヘル内陸国であるチャドが抱える貧困・紛争・砂漠化の問題について、先行研究の紹介を交えながら簡潔に触れられている。なお、サーヘルとはサハラ砂漠南縁に広がる年雨量が200mm～600mmの地域である。サーヘル内陸国はチャド、ニジェール、マリのカ国であり、いずれも人間開発指数では最下位グループの国と言えること、この三カ国は全て紛争が多発してきた国であり、チャドのケースでは南北対立から北部諸勢力間の対立に移行してきたこと、および、国際社会での「砂漠化」理解と、現地で起こっている砂漠化とのズレが生じていることが示される。

第一部は「内陸チャド盆地の地理・生業・文化」と題されている。第一章から第三章までが含まれ、生業・地理・文化が互いに連関しあってチャドの多様性が生まれたことが論じられる。特に、乾燥地帯の北部と湿潤地帯の南部で、それ

\* 東京外国語大学大学院

ぞれの気候に基づいた生業が営まれ、それに対応して、文化の違いも生まれていることが示される。

第一章では、内陸チャド盆地の具体的な自然状況が考察される。チャドは北半分が砂漠であるものの、南部では急速に湿潤度が高まる。チャド盆地は内陸の盆地であり、全ての河川は中央のチャド湖に集まる構造となっている。チャド湖への流入の源となるのは南から流入するシャリ川とロゴンヌ川の2つの河川であり、チャド湖への水供給の9割を占める。そして、気候帯と植生は降水量に従って5つに分類され、気候帯と植生は対応していることが示される。

第二章では、前章の気候に関する記述を踏まえた上で、生業の多様性について論じられている。チャドの農業は6種類に分類されることと、南部では氾濫原を生かした農業が行われており、商品作物の栽培も植民地期以降行われるようになったことが示される。

第三章では、文化的な多様性が論じられている。チャドの国土面積は128万平方キロメートルで、1163万人の国民が住む。チャドは北部の一部地域では、人口密度が低い(平方キロメートルあたり0.13人)が、南では高くなっていく傾向があることが明らかにされる。そして、人口分布と、第二章で示された生業の分布は関連していることも論じられる。

また、チャドには多様な言語が存在するものの、ウシ牧畜民アラブ・シュワの話す口語アラビア語は、チャド北部から中部にかけてリングア・フランカ(共通語)になっていることが示される。フランスによる植民地経営は湿潤かつ農業生産性の高い南部の開発が中心であった。そのため、フランス語教育も南部を中心に行われていたものの、普及率は極めて低いままにとどまった。また、1980年代以降、正則アラビア語も公用語となった。

宗教の面においては、北部では主にイスラーム教が信仰され、南部では植民地時代に宣教されたキリスト教が信仰される点が特徴である。

第二部「サーヘル内陸国チャドの形成と近代政治経済史」には、第四章から第七章までが含まれている。前近代においてサハラ南縁イスラーム文明の中心地であったチャドが、植民地化の中で「後進化」したことが論じられ、後々まで紛争が続いたことについて述べられている。

第四章では前近代のチャドについて論じられる。9~10世紀にかけて、サハラの南北交易が広く行われるようになった。また、サハラ南縁には現モーリタニアやマリからチャドを経てアフリカ東岸および紅海・アラビア半島までを繋ぐ東西の交易ルートもあり、メッカ巡礼路でもあった。この南北・東西の交易によって栄えたカネム・ボルヌ帝国の絶頂期は13世紀

と15・16世紀に現れた。

第五章では植民地の形成について論じられる。チャド盆地は19世紀の植民地化競争の中で最後まで空白であった。しかし、最終的にベルリン会議でフランスの植民地になることが決定され、3度の遠征の後に実効支配に至った。

第六章では、チャドの植民地経営と独立後の経済について論じられる。恣意的な分割によって国境が分けられた背景から、それまで交流がなかった牧畜民と農耕民との共存も重要となった。また、アフリカ諸国が異なるヨーロッパ諸国に分割されたことにより、前述の南北・東西の交流は断ち切られてしまい、チャドは内陸に孤立することとなった。フランス政府はギニア湾まで商品を輸出することを試みていたが、それは多大な日数のかかる困難なものとなった。

元来軍事的な優位性を確保するためにチャドの占領を選んだフランスは、あまり開発には積極的ではなかったものの、人口密度が高い西部と南部、シャリ川左岸とロゴンヌ川流域では、落花生・綿花・稲といった換金作物栽培が行われた。それに加えて、重要な外貨収入源として1950年代に石油が発見された。現行のデビ政権下で石油採掘が促進されているが、石油開発の恩恵は国民まで及んでおらず、反政府武装勢力掃討などに資金が使われている。

第七章では、植民地独立以降の歴史について論じられる。異なるエスニシティー集団が混在するチャドでは、紛争が相次いできた。チャド最初の大統領トムバルバイは南部出身のキリスト教徒であり、南部の慣習を北部に強制することを試みるなど、強権的な政治を行ったが、それに対して北部出身者がイスラーム組織 FROLINAT を形成した。不満を持ったチャド軍将校らによってトムバルバイが暗殺されたものの、その後形成された FROLINAT 出身のハブレと南部出身のマールムの連立政権はすぐに崩壊し、ハブレの私兵隊である FAN とチャド正規軍の対立は軍事衝突に発展する。この混乱の中、もう一人の FROLINAT の有力者であるグクーニは私兵隊 FAP を組織した。

混乱の終息のためにチャド近隣諸国とフランスの仲介によって暫定国民連合政府が成立し、グクーニが暫定政府の大統領となった。しかし、暫定政府に参加した諸勢力は、それぞれの私兵隊を用いて、それぞれの支配領域を持ち続けており、グクーニの統治が及んだ範囲は北部と首都に限られていた。チャドの北方のリビアと協力関係を強めるグクーニに対し、リビアと対立するスーダン・エジプト・アメリカの支援を受けたハブレは首都を占領することに成功し政権を奪い、グクーニは最終的にアルジェリアに亡命した。

ハブレは独裁政権を敷いていたが、その中でクーデターを

企てたとして肅清対象となったデビはスーダンに亡命し、そこから愛国救済運動（MPS）を組織した。MPSはスーダンの拠点出発後2週間でンジャメナを占領することに成功した。1990年の大統領就任後、現在に至るまで統治を続け、デビ政権はチャドの歴史上最長政権になっている。

第三部「サーヘル内陸国チャドの砂漠化と住民生活」では、第八章から第十一章までが含まれている。筆者の駐在経験をもとに、チャドの砂漠化に関する国際機関やNGOの認識と、現地の人々の生活とのズレが論じられている。

第八章では、サハラ南縁の気候変動と砂漠化について論じられる。サハラとその南縁では、気候変動は気温変動ではなく乾湿変動として現れる。その示標として現れるのは、サハラの砂漠領域の拡大とチャド湖水域の拡大・縮小である。1960年代から続いた干ばつは地域住民に多大な被害を及ぼした。

1977年からは国連砂漠化防止会議が開かれるようになったものの、砂漠化に関して、広義の砂漠化である desertification と狭義の砂漠化である desertization が混同されて用いられる状況が続いている。前者は広い意味で土地荒廃を指すものとして砂漠化を捉えているのに対し、後者は砂漠景観の拡大を指している。

国際社会は前者を砂漠化と捉え、その原因に人為的要因（過伐採・過放牧・過耕作）があると考えた。しかし人為的要因を強調することは、砂漠化に関する地域の在来知を生かさず、一方的に否定するにとどまってしまった。70～80年代に広く行われた植林による砂漠化対策は成功しなかったが、この背景には、現地で長年行われてきた人間生活の軽視があると著者は捉える。

第九章では、南縁地域において、人々の生業・生活の中で、気候変動に対する防御機構が組み込まれてきたことが論じられる。著者はチャド湖南岸の町トゥルバで聞き取り調査を行った結果、過去トゥルバではほとんど人が住んでいなかったことおよび、今この町に住む農耕民であるカネムブ部族は、19世紀に北方の町であるデビニンチを離れ、トゥルバに移動したことが明らかになった。

この移動は、干ばつでデビニンチが農業を営むことが不可能な土地となったこと、およびトゥルバ地域はもともと耕作不可能な土地であったが、気候の乾燥化に伴って土地が広く干出したため、耕地へと変化したことが背景にある。また、社会的要因として紛争も背景にあった。また、トゥルバ周辺では農業のみならず、乾季に小規模労働や賃労働を行って生計を立てていることも明らかにされている。

第十章では、国際社会での一般的な砂漠化理解と、現地

の人々の砂漠化理解の隔たりの例として、筆者が所属していたNGO「緑のサヘル」が取り上げられる。「緑のサヘル」はバイリと、十章で取り上げられたトゥルバの二か所で活動を行った。バイリでは「緑のサヘル」の手によって、育苗と植林、改良かまどの普及、農業の改善が行われた。また、トゥルバでは、チャドの国家公務員のムスタファ氏を「緑のサヘル」の活動責任者として兼任させた。しかし、それぞれの地域の活動の中で、現地のニーズとの齟齬がはっきり表れた。また、現地の人々とのかかわりの中で、本来の計画にはなかった少額貸与による共同穀物庫支援や淡水魚養殖実験および井戸の掘削等も行った。

第十一章では、現地の論理とNGO「緑のサヘル」の論理の齟齬の例として、改良かまどの例が挙げられている。改良かまどは、火のまわりを覆うことで効率のよい燃焼を目指したかまどであり、現地で使われている鍋を三つの石で支えるだけのかまどに比べ、より薪消費が少ないと考えられていた。しかし、従来のかまどは、主食であるピリを様々な大きさの鍋を用いて強く練り上げて料理する際、石を調節して鍋がズレないように固定することができた。しかしながら、改良かまどは口径が固定されているため、鍋の大きさと口径に必然的にズレが生じ、練り上げて調理することが難しい。また、三世帯の調査により、薪消費はかまど自体の性能より、かまどの数・食材・薪の割り方・薪の購入者が調理者と同じかどうか、といった要因に大きく左右されることが明らかになった。

終章においては、「チャドが直面する、貧困、紛争の根本的要因は、植民地化によるチャドの内陸化にある」（197p）と述べた上で、貧困・紛争・砂漠化の構造を論じる。貧困の背景には、内陸化によって生まれた近隣諸国との分断、および一部に偏重した開発が挙げられ、紛争の問題の背景には、経済構造の問題や国土統治システムの不在および、他国の干渉が挙げられている。

また、砂漠化の背景としては、国際社会の砂漠化理解と現地とのズレ、および砂漠化対策の実効性の低さが挙げられている。また、著者は過去の「緑のサヘル」を始めとするNGOもまた、結果を可視的に示すことができる植林に力を入れたものの、それは住民のニーズに合致しておらず、生活改善に寄与しなかったと位置付けている。しかし、現在の「緑のサヘル」は、生活改善を重点に置いているとして、期待を示している。

以上が本書の概略である。本書は数年にわたる地道な現地調査に基づいて、現在チャドで進行中の紛争の背景を示唆する貴重な書物であると評者は考える。チャドにとどまらず、その他のシリアやイエメンやイラクといった、紛争の続く

現地調査の難しい地域においては、「イスラム国」や「ボコ・ハラム」といったサラフィー・ジハード主義組織が、公式の場で統治の正当化のために用いている、イスラーム教の政治神学的な側面の解明が重要視されがちである。しかしながら、そのような側面が重視されるあまり、あたかも現地の人間が宗教的な原理に基づく行動だけを行っているように誤解されることも多い。本書では宗教はチャドの多様なエスニックな背景のごく一部として扱われているが、ここには彼らの行動の宗教的側面が過剰に強調されることによって生まれる誤解を正したいという、著者の意図があったのではないかと評者は考える。

また、ナショナリズムと植民地主義を論じる際には、宗主国や独立後の近代国家の役割が重視されるあまり、前近代の歴史や人々の生活にはごくわずかにしか頁が割かれなことも多い。しかし本書では、著者の複合的に論じる方法論の中で前近代にも目配りがなされている。これらの点から、非常にバランスの取れた書物であるという印象を受けた。

しかし、本書を一読した際に、貧困・紛争とその背景について記されている第一部および第二部と、砂漠化問題と「緑のサヘル」の活動について記されている第三部とのつながりを示す記述がほぼ皆無である点が気になった。そのために、植民地時代の統治に起因する内陸化から生じた貧困および紛争の問題と、砂漠化問題の関連性が読み手に分かりやすく示されていない印象を受けた。

強いて読み込むならば、第十章の165pにおいては、国家公務員のムスタファ氏を「緑のサヘル」のトゥルバ地域の責任者とした背景として、同氏が現地の住民からの信頼が厚いことのみならず、チャド政府は国家公務員がNGOの仕事も兼務することを推奨していたことが示されている。ここには、政府の財政難によって国家公務員に対する給与支払いが困難になっていること、および専門教育を受けた人物を国家開発に有効活用したい意向が背景にあると記されている。

ここからは、チャドの貧困・紛争によるワーキング・ガバメントの不在によって、行政が主体的に住民の意見を汲み取って生活支援を行うことができず、外国のNGOに委託してしまっているという構造が読み取れる。この構造は、まさにチャドの貧困・紛争と、現地の生活を軽視していた「砂漠化対策」が関係していることを示すものと思われる。この点について、第一部・第二部と第三部を架橋する論述として、詳細に別章で示されていたならば、本書はより明快なものとなったのではないだろうか。

最後に、敢えて自らの過去の「緑のサヘル」での活動への批判的な眼差しのもとに、この本を執筆された石山俊氏に深

く敬意を表したい。